

## 音声知覚の理論

### 1．母音の知覚

母音にはフォルマントが存在する。フォルマントとは、音声スペクトルを取ると特定のいくつかの周波数に表れる強い分布であり、低い方から、第 1 フォルマント、第 2 フォルマントと呼称する。母音発生の大きな要因は舌の位置(舌の高さ、舌の前後)による。

しかしながら、母音の発音に関しては、大人と子どもでは大きな差異が認められることから、人間は脳において、母音の正規化を行っていると考えられる。また、聞き手が話者の調音器官について目から情報を得ているという説もある。

### 2．子音の知覚

母音と子音の組み合わさった音声のスペクトラムを取ると、定常部（ほぼ時間軸に平行）と遷移部（時間軸に急激な立ち上がりがある）に分けられる。この遷移部があることによって子音が子音と知覚される。

### 3．カテゴリー知覚

アメリカのライブマンを中心とするグループによって報告された。カテゴリー知覚とは音声の同定と弁別の間にある一定の関係である。つまり、2 つの音声を連続的に変化させて、それが同じものであるか異なったものであるかを答える。このようにして同定曲線と弁別曲線が得られる。

### 4．音声知覚の運動理論

音声の産出に際して調音器官を「動かす」ために脳が送り出す神経の信号である運動指令が、音声の知覚過程にも利用されているのではないかという理論。

### 5．両耳分離聴

両耳分離聴とは両方の耳に異なる音が同時に提示される状況である。これは大脳の両方の半球と結びついており、通常は、単語を左耳と右耳に聞かせた場合、たいてい右耳に提示した単語の正答率が高いというデータがある。

また、閉鎖子音については絶対的に右耳の有意があるが、母音において、雑音があたりはつきりしなくなると右耳の方が有意であるが、さほど、左右での違いは認められないという報告もある。

### 6．乳児の音声知覚

乳児は生まれながらにして音声知覚能力を備えているという例が数多くあげられている。また、生後わずか 2、3 週間の新生児が外国語と比べて親の話す言語に対して強い嗜好を示すことも明らかにされている。

## 7 音声知覚の発達

乳児は生後すぐには世界中の言語におけるどんな言語音の対立でも弁別する能力を示すが、生後1年ほどで母語に適した形で音声を知覚し始める。

## 8 動物と人間の音声

動物(哺乳類)も音声のある程度認識している。人間も哺乳類だとするとこの考えも妥当と思える。しかしながら、哺乳類が全ての人間の音声を知覚できるというわけではない。「音の基本的な音響的な違い」を認識しているに過ぎないのであろう。音を聞くというのと言葉を聞き取れるということが大きく違うということであれば、人間は言葉を聞き取れる有いつの動物であると言える。